

琉球大学学術リポジトリ

「ユーモア」から「異文化理解」へのアプローチ： アクティブな英語辞書活用の提案

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2017-05-12 キーワード (Ja): ユーモア, 異文化理解, レトリック, アクティブ・ラーニング キーワード (En): 作成者: 兼本, 円 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36603

「ユーモア」から「異文化理解」へのアプローチ
—アクティブな英語辞書活用の提案—

兼本 円

Understanding American Culture through Humor
: Using Longman's Japanese English Dictionary as a Guide

Madoka KANEMOTO

琉球大学大学院教育学研究科
高度教職実践専攻(教職大学院)紀要
第 1 卷

Department of Teacher Education
Graduate School of Education
University of the Ryukyus
No. 1

2017年3月

【実践報告】

「ユーモア」から「異文化理解」へのアプローチ

—アクティブな英語辞書活用の提案—

兼本 円

Understanding American Culture through Humor
: Using Longman's Japanese English Dictionary as a Guide

Madoka KANEMOTO

要 約

英語を生涯学習として学ぶ際のハードルの一つに、辞書に記載されている意味内でしか語彙を操作できないことがある。学習者自身の母語である日本語の運用であれば、辞書の意味定義からずらして使うこともできるが、英語となると、多くの学習者が辞書的定義内で「お手本通り」の学びに陥ってしまっている。本稿では、『ロングマン英和辞典』をデータにして「ユーモラス」とラベル化された語に焦点を当てて、1) ことばの意味をアクティブに操作する一方法としてレトリック分析で考察した、2) 「ユーモア」の理解と実践が「アメリカ文化理解」に繋がる可能性も説いた、3) ユーモラスな意味を充分に理解するためには、基礎的修辞法の操作と語がもたらすイメージに思いを馳せれば、さほど複雑ではないことも説明した。

キーワード：ユーモア 異文化理解 レトリック アクティブ・ラーニング

1. はじめに

言語学・外国語教育に関心のあるなしに係わらず、誰もが「ユーモアは生きて行く上で大切である」と認めているところであるし、「文化によって何をユーモアとするかも異なる」と理解している。後者の思い込みは学問的にも同じようで、「日本ユーモア学会」と交流の深い国際学会である International Society of Humor Studies (ISHS) においても未だに「ユーモアの定義」には唯一のものは存在しない (McGrow & Warner, 2014, p. 6)。しかしながら、いずれの文化・社会においてもユーモアはマストであり社会的「潤滑油」であることは認められている。英語学習においてもこのマストが欠落しては、生涯学習としての認識は望めない。

2. 目 的

「英語辞典に頼ってばかりいると、コミュニケーション能力は育たない」、ましてや「異文化理解を辞典に期待してはいけない」などの趣旨の警告をよく聞く。しかし、この警告は辞書・辞典を全否定するものではない。英語学習上辞書は必需品であることは誰もが認めるところだ。それでも辞書・辞典類が否定的に見なされるのは、使用者が受動的に機械的に意味をチェックすることのみに終始しているからである。よって、拙論では「辞書・辞典類はアクティブに使用することができる」を前提にして、次の3つにせまることをその目的としている。1) 英語辞典類をアクティブに活用して英語語彙の「おもしろさ」を再認識すること、2) 英語語彙の「多義性」を再認識すること、3) 「異文化理解」は1)と2)を継続していけば可能であることを認識することである。特に3)において、学習者はアメリカ人のユーモア

は日本人には分かりづらいので、「異文化理解」は望めそうもないと決め込んでいる節がある。

3. 方法

「ロングマン英和辞典(2007年版)」から「ユーモラス」とラベル化されている語13を選択した(同辞典には72個の語が「ユーモラス」とラベル化されている, 論文末を参照)。13語選択の基準は次の2つの何れかを満たしているかである。1) 筆者が思うところの大学の共通教育科目としての英語の知識として重要であること, 2) 日本語の中でも既に「カタカナことばとして馴染まれているもの」, である。その上で, 選択した語を2つの観点から考察した。1) 瀬戸(2014)の分類を参考にして, 「ユーモラス」とされた語が修辭的にどのような技法で成り立っているのか(参考文献の瀬戸のテキストは筆者が数年授業で使っているもの)。2) 「ユーモラス」とされた語がどのような複数のイメージと重なっているのか。これらの観点はさほど専門性に偏らず, 小学校の英語の授業でもユーモア導入のきっかけになれると判断した。

4. 「ユーモア語」の考察

以下にアルファベット順に語を大文字とボールドで記し説明する。

(1) ABLUTIONS

“ablutions”は本来「みそぎ」のことで, カトリックの「洗淨儀式」である。後者と「入浴」との共通点で, 水に注目した隠喩が働いて「ユーモラス」とされている(考察1)。入浴する度に「みそぎ」を意識する者は殆どいない。大袈裟に表現したという意味では誇張法の働きもある(考察1)。語の選択基準1)だが, 「英会話」の中では聞き慣れないことばであるが, 宗教的事項とユーモアとの関連性に気づくものとして重要だと思われる(基準1)。宗教の持つイメージと日常のイメージは乖離しているが, この語解釈によって重なる(考察2)。中学・高等学校の英語教育は積極的にことばと宗教の関係を取り入れていない。宗教理解なしの異文化理解が可能だろうか。歴史を振り返れば, 宗教と文化との結びつきは否定できないので, 宗教理解なしの異文化理解は難しい。この語は, それを補填できる可能性も孕んでいる。別の例を取るならば, 朝食のbreakfastはfast(「断食」)をbreak(「終える」)とよく説明されている(この種の説明には最高学府の学生ならば語の棒暗記を超える喜びも感じると思う)。

大学生は, 長年学んで来た英語にある意味「古さ」感を抱いてしまっているが, この種の「宗教」, 「日常」, 「ユーモア」の3つのイメージが重なる語の存在に気づけば英語学習に「新しさ」感を持つきっかけになるに相違ない(考察2)。

(2) ANCIENT

この語は英語学習者にとって, 「古来の」, 「大昔の」という意味で知られ過ぎていることばである(基準1)。しかし, この学習上新鮮味のないことばも「ユーモア」を発揮することができる。例えば, “The old man is not just old, but ancient.”(「老人は年寄りではなく, 太古の人だ」)のような場合である。人は長生きしても約100年である, 到底“ancient”に達することはない。よって, この語は誇張法として使われている(考察1)。既習の“ancient”の語のイメージと人間のイメージはユーモアによって繋がりを持たされていることが分かる(考察2)。さらに, この語の説明から類推できることは, ユーモアとは卓越したセンスの持ち主のみに許された能力ではなく, 普通のことばの仕組みを理解する中にあるということだ。この気づきは古すぎる語を新鮮に見直すことができるきっかけになり得る。

(3) BRUTE

“brute”は「(男を指して)野蛮人」, 「人でなし」と記されている。「男性」と「大きな野獣」との類似性はステレオタイプ域内のことであるが, 男性は女性よりマナー知らずで(野蛮人), 人でなしの

「野獣」は人間世界から見るとマナー知らず。これが第1の類似点である。第2の類似点とは男性は女性より体が大きいし、野獣も同じく大きいというイメージである(考察2)。よって、2つのイメージ/類似点からこの隠喩が生まれて「特にユーモラスに」と記されるようになったと考えられる(考察2)。さらに、ここでは男性を人間以下の野獣に見なすという逆の擬人法が使われている(考察1)。この種の擬人法を「格下げ擬人法」と呼ぶことにする(本来ならば、同辞典も単に「大きな野獣」と記すのではなく、「(男を指して)大きな野獣」とする方が分かり易いと思う)。この語の意味から類推して学べることは、「ユーモアにはステレオタイプがつきものだ」ということだ。異文化理解のきっかけづくりとしては、「ユーモアを知ることによってその文化の持っているステレオタイプを学ぶことができる」ということである(中野(2009)の「英語ジョーク快読のススメージョークがわかれば、言葉も文化もわかる」を参照)。

(4) CYBERWIDOW

“cyberwidow”とは「コンピュータにはまっている男の妻」とされて「ユーモラス」のラベルが付されている。このcyberとは既に「広辞苑」にも掲載されており巷でも「サイバー・スペース」、「サイバーテロ」等として使われている(基準2)。しかし、この辞書の説明だけではユーモアとしては分かりづらい。“widow”は「未亡人」のことである。夫に先立たれた妻はほっておかれる。“cyberwidow”になった妻の夫は亡くなってはいないが、彼女は「ほっておかれる」という意味において類似点を持っている。つまり、隠喩法が使われていることになる(考察1)。この“widow”語が生産性を持っていることにも注目したい。例えば、“golf widow”や“football widow”ということばを生み出している。ここでも「ほっておかれる」というイメージが生きている。さらに、この語を含む何れの“widow”語には「亡くなくてもいない夫」を「亡くなっている夫」とみなすブラックユーモア的なイメージも有していると言える(考察2)。因みに、“pachinko widow”の用法も可能である。

(5) DEMON

“demon”は「悪霊」、「悪魔」である。日本語としても「デーモン」の表記で流通している(基準2)。「悪魔」であれば、「魔力」を備えている。凡庸な者を遥かに凌ぐ力を持つものが、demonである。善悪を超越した非凡的能力に注目すれば、辞書の記載通りに「名人」や「天才」になれるので、隠喩の働きがあるといえる(考察1)。同時に「悪のイメージ」と「善のイメージ」が重なっている(考察2)。この語を「ユーモラス」に用いる者の動機は「名人」に対する羨望も考えられる。「一芸に秀でていても、他は人間として駄目」のアイロニー(「皮肉」)が込められていることも理解できる(考察1)。「天才」をより抽象的と捉えて、「デーモン」をテレビ・映画で慣れ親しんでいると捉えた場合は「抽象的な対象を具体的なものに見立てて表現する」隠喩としても考えられる。

(6) FLEAPIT

“fleapit”は語としては、“flea”(「ノミ」)と“pit”(「穴」、「奈落」、「わきの下」)で構成されている。前者は「蚤の市」として、後者はカーレース中の「タイヤ交換」の場所としても知られている(基準2)。この語が即座にもたらす意味は「ノミのたまり場」である。辞典では「うらぶれた場所[映画館]」と説明されている。ノミのイメージは直射日光の乏しい暗がりをお好む虫である。映画館も明かりに乏しい。この語には場所としての隠喩が使用されている(考察1)。そこに集まる人も大きなスクリーンに登場する俳優と比べて蚤のように小さい。誇張法はしばしば拡大することのみに使用されていると勘違いされるが、この語の視点では極度にサイズ・ダウンされている。この極端なサイズ・ダウンも誇張法の1つである(考察1)。日本語で言えば、「猫の額ほどの土地に家を建てた」という表現もサイズ・ダウンの誇張法である。イメージの重なりとしては、「汚い場所」(穴)と「輝かしい場所」(銀幕の映画館)が重なっていて「ユーモラス」と解釈できる(考察2)。

(7) GRANOLA

“granola”は「グラノーラ(シリアルの種類)」と記されているが、他の意味は「環境オタクの(健康自然食品を愛好し、環境問題に熱心な人)」であり、「ユーモラス」とラベル化されている。この語の解釈は“What you eat is what you are.”(「医食同源」)の諺を適用すると分かり易い。現在、肉食主義は自然破壊者であり、菜食主義は逆の環境保護者とみなされがちである。“granola”は穀物混合物、よって、それを食する者は環境保護者となる。さらに、「食物」と「食する者」は隣接関係にある。その関係の中の一方向で他方を表している。グラノーラを食する人がグラノーラによって置き換えられている。故に、換喩法が働いている(考察1)。さらに、ここでは先述の“fleapit”に同じく、大きな者としての人間が小さな物のグラノーラに喩えられている、誇張法が使われている(考察1)。この点でも「ユーモラス」な解釈が可能と言える。同類語として“tree-hugger”(「木にしがみつくなどして抗議する」)環境保護論者があるが、この語をロングマンでは「けなして・インフォーマル」とラベル化している。おそらく、“tree-hugger”はことばとしては古くなりユーモアが薄れたものと考えられる。当然ながら、ことばの意味は時と伴に変わって行くし、一時期に「ユーモラス」とされていたことばも廃れて行く。困みに、欧米化した日本では朝食用に既に「グラノーラ」や「グラノラ」と称されて市場に出回っている(基準2)。

(8) HEAP

“heap”の原義は「山積み」であるが、「ユーモラス」としてラベル化がなされていて、その意味としては「ポンコツ車」とされている。「山積み」の具体例として辞典には「山積みになった服」の図を挿入している。これから分かることは、“heap”で予想される「山積み」は「整頓されていない山積み」である。この連想をそのまま横滑りさせたものが「ポンコツ車」になる。移動しない「山」のイメージが動く「車」のイメージに重ねられるところが「ユーモラス」と言えよう(考察2)。穿って可視化させると、「鉄くずが無雑作に山積みになっていて、それ自体が運転されている」状況にあり、いつ山が崩れるのか知らない危険な状態を示している。この意味で「危険」且つ「ユーモラス」な解釈が成り立つ。レトリックに戻るならば、車は「ポンコツ」であろうが「名車」であろうが立体である「山」とみなすことも可能だ。その点は似ていることになる。そこに着目した視点なので、「隠喩法」が働いているとみなせる(考察1)。この「山積み」は先の「山積みになった服」と同様、崩れても「ほったらかされる」運命の共通点もある。

(9) HE-MAN

“he-man”は「(筋肉)ムキムキマン」とされて「ユーモラス」とラベル化されている。造語法としてはハイフンの後が“man”(「男」)である。よって和訳でも[マン]が使われている(“man”=「マン」で基準2)。このハイフン前の“he”が「ユーモア」を生じさせていると考えられる。この種の“he”は他にどのように使われるのか。“he-goat”(「雄ヤギ」)、“he-wolf”(「雄オオカミ」)のように動物に付く、正に「雄」である。よって、本来“man”の「人間の男」に付くものではない(この組合せだと「雄男」になる)、よって部分的反復法と見なすことができる(考察1)。ここでは反復で「雄らしさ」を過剰に持たせることで「(筋肉)ムキムキマン」と説明され「ユーモラス」に解釈されることが考えられる(男性のイメージと動物の雄のイメージを重ねる、考察2)。類語として“macho”があるが、この語は「男っぽい」、「マッチョな」を意味するのみである。“he-man”は「雄そのもの」の肉体、筋肉が強調されている。レトリックで考えるならば、「動物の雄」と「人間の男性」を「筋肉」で類似性を指摘して隠喩的視点に立っての造語法である。それと同時に、先述した格下げの擬人法とも言える(考察1)。

(10) IVORY

“ivory”は「象牙」であり「象牙製品」であるが、「ユーモラス」な意味として「(人の)歯」と記されている(「アイボリー」として広辞苑のエントリーでもある、基準1)。象牙の代表格はまさに象の牙

である(セイウチの牙も同じく ivory)。当然、この牙は色こそ類似しているが人間の歯に比べて巨大である。よって、色のみ注目するとこの語は単に隠喩を使っているように思える(考察1)が、しかし、巨大な物を大幅に縮小しているところで「ユーモラス」な意味を作り上げている。ここに別のレトリック、「誇張法」が働いていることが理解できる(考察1)。この語が「ユーモラス」に理解される理由がまだある。吟味すれば、「牙」は咀嚼のためのものではないが「歯」はそうである。「牙」から連想される機能は「攻撃」である。バンパイアのイメージを重ねることで、一見、人間の歯が攻撃性を有しているように勘違いさせる点も「ユーモラス」に解釈できる(考察2)。さらに、色以外にもこの語の隠喩を成り立たせている可能性がある。「人間の歯の基質をなす黄白色の硬い物質」は「象牙質」と呼ばれている(「広辞苑」)。科学的要素も隠喩を支えているものと考えられる。

(11) LOVEBIRDS

“love”も“bird”もそれぞれ「ラブ」と「バード」として日本語の中でも馴染まれている(視点2)。“lovebirds”とは「ボタンインコ」のことであるが、ロングマンでは筆頭の意味に複数扱いで「熱々のカップル」,「おしどり夫婦」と記されて「ユーモラス」とラベル化されている。「ボタンインコ」は比喩抜き、ユーモア抜きの意味である。その逆である場合には辞書使用者は筆頭にくる意味が次点にくる意味より一般的であると思うに相違なく、「ロングマン英和辞典」が如何にユーモア理解の大切さを力説しているかが分かる。英語においては“bird”が人間に喩えられることは一般的である。残念ながら負の意味が多いようだ(“a strange bird,”(「変なやつ」) “a clever bird,”(「ずるいやつ」) “a home bird”(出不精の人)等が挙げられる(「ランダムハウス英和辞典」)。しかし、この見出し語が通常複数形を取るということと、通常この鳥は野生での生息地アフリカで見る以外に欧米では一般的にカゴの鳥であるという点に注目すると、2羽が小さなカゴに寄り添っている状況が目につく。2羽の鳥と2人の人間の寄り添うようすを類似性として捉えた比喩、隠喩としての発想で誕生した語である(考察1)。しかし、「熱々のカップル」を捉えたこの語は良い意味だけが託されているわけではない。「リーダーズ英和辞典」(第3版)の説明では「仲むつまじい[人前をはばからない]カップル」という命名の理由づけが記されている。人間の場合には2人は接近したり離れたりで調節可能だが、カゴの鳥は閉じ込められているために離れようがない。そう考えると、一見して同類に見える鳥と人間だが「人前をはばからない」のは人間だけになる。その点でも「アイロニー」であるとの解釈が可能である(考察1)。さらに、体の大きい人間が小動物である鳥に縮小されて表現されていることも「誇張法」とも、格下げの擬人法とも考えられる(考察1)。

(12) MONSTER

“monster”は字義通りの意味は「怪物」,「化け物」,「ばかでかいもの」である。しかし、この語は「特にユーモラスに」としてラベル化されている。その意味は「(行儀の悪い)子供,ガキ」とされている。3つの意味のどちらを取っても普通の人間の大人では「手におえない性質」を示している。レトリックとしては、「小」を「大」に喩える「誇張法」である(考察1)。穿って考えると、「小」(子供)は「大」(大人)によって制御できるものだが、この場合にはできないわけだから、さらに面白味が増すことになる。我が子を monster ではないと見なせても他人の子にはそれができない(こっぴどく制御できない)。この自と他のイメージの重なりをこの語に取り入れてもユーモラスな解釈が成り立つ(考察2)。ロングマンの例文は“He’s a little monster.”(「あの子は始末におえないガキだ」となっている。この文でも“little”(「小」)と“monster”(「大」)が並列してユーモアの度合いを高めている。さらに、この“little”の意味には「愛おしさ」も含まれるので、「撞着語法」的に解釈できる(考察1)。しかし、この形容詞がなくとも“monster”には「愛おしさ」が含まれていると解釈できる。monsterは動きがぎこちない、子どもも同じくぎこちないからだ。共通点としては「ぎこちなさ」があり、それでユーモラスな隠喩となりえる(考察1)。

(13) OFFSPRING

“offspring”は通常「(動物の)子, 子孫」という意味であるが, 「フォーマル/ユーモラス」とラベル化された意味では人間の子どもに対しても使用される。「子孫」の意味では「生物学」の教科書でよく使用される。動物と人間は大いに類似点があるので隠喩が使われていると解釈できる(考察1)。人間は野蛮な動物として, 鳥として, 食べ物として, 蚤として, さまざまなものに喩えられている(因みに(12)では人間がmonsterに喩えられる例を記した)。しかし, 聞き手や読み手はこの語が「フォーマル」な意味で使用されているのか(例えば生物学のことば), 「ユーモラス」な意味で使われているのか瞬時には分からない。そこに「ユーモラス」に解釈した方が「楽しい」と思わせる半強制的選択が仕組まれていると考えることが可能だ(自分の子でも他人の子でもこの語で称した場合を考えてみても)。ここでもレトリックでいう「擬人化」の格下げ(人間を動物視する)を使用していると考えられる(考察1)。イメージの操作でいえば, 動物のイメージと人間のイメージが重なっている(考察2)。

5. 結び

列挙して考察した13の語は「ロングマン英和辞典」の中の72語で「ユーモラス」としてラベルが付されたものである(その中には「特に」という但し書きがあるものとなないものがあるが, その区別は省略して考察している)。他の59項目の全てに関しては記載できなかったが, 英語学習者が慣れ親しんできた意味をずらして, または視点を変えることで「ユーモラス」な意味を持たすことができることを指摘した(参考として末尾に72語と意味等を記載した)。

ユーモラスな意味を十分に理解するためには, 基礎的修辞法の操作と語がもたらすイメージに思いを馳せれば, さほど複雑ではないことも分かった。前者の操作で顕著に見られたものとして「誇張法」と「擬人法」があった。後者としては学習者が語の基礎的イメージとして持っている複数のイメージである。例えば, 宗教の持つ「洗浄儀式」と日常の「風呂」との重なり。「目的」の項で述べたことを換言するならば, こうした気づきは, 「アメリカンユーモアは辞書を読み, 考えることでさほど遠くにあるものではない」と思えて身近に捉え直すことが可能である。大学の授業でよく聞く「英語は理解できても, アメリカ人のユーモアが分からない, 全くの異文化だ」との誤った声もこのアプローチをもってすればある程度正すことが可能である。

『ロングマン英和辞典』の「ユーモア」と符号化された語彙

番号	単語	ユーモア度	ユーモラスな意味
1	ablutions	特にユーモラス	体を洗うこと
2	abode	特にユーモラス	住居, 住所
3	amour	特にユーモラス	情事の相手, 愛人
4	beak	ユーモラス	わし鼻
5	booty	ユーモラス	もうけ物, 掘り出し物
6	brute	特にユーモラス	大きな野獣
7	caboose	ユーモラス	しり, けつ
8	calamity	ユーモラス	厄介事, 大変なこと
9	contretemps	ユーモラス	(ちょっとした) いさかい, 災い
10	coupling	ユーモラス	性交, 交尾
11	cybersickness	ユーモラス	コンピュータのやり過ぎで気分がわるくなること
12	cyberwidow	ユーモラス	コンピュータにはまっている男の妻
13	demon	ユーモラス	名人, 天才
14	derriere	ユーモラス	おしり
15	ditty	ユーモラス	(単純な) 詩, 歌
16	egghead	ユーモラス	インテリぶる人, 頭でっかち
17	flash	特にユーモラス	ちら見
18	fleapit	ユーモラス	うらぶれた場所 [映画館]
19	fleshpots	ユーモラス	歓楽街
20	gaffer	ユーモラス	じいさん
21	glitterati	ユーモラス	きらびやかな有名な人たち
22	heap	ユーモラス	ぼんこつ車
23	heathen	ユーモラス	俗物, 教養のない人
24	heinie	ユーモラス	おしり, けつ
25	he-man	ユーモラス	(筋肉) ムキムキマン
26	impedimenta	ユーモラス	(厄介な) 手荷物
27	ivory	ユーモラス	(人の) 歯
28	libation	ユーモラス	酒
29	lovebirds	ユーモラス	熱々のカップル, おしどり夫婦
30	lovefest	ユーモラス	うわべだけ仲がよさそうな人たちの集まり
31	lughole	ユーモラス	耳
32	member	特にユーモラス	陰茎, 一物, [むすこ]
33	missive	特にユーモラス	(重要な) 書状, 通知
34	monster	特にユーモラス	(行儀の悪い) 子供, ガキ
35	moppet	特にユーモラス	小さい子
36	mortal	ユーモラス	(知識人・金持ちなどに対して) 普通の人, 庶民
37	neanderthal	ユーモラス	大柄で醜悪な人
38	offspring	ユーモラス	(人の) 子供
39	opus	ユーモラス	(作家・画家などの) 傑作, 大作
40	pagan	特にユーモラス	不信心者
41	pardner	ユーモラス	(親しい人への呼びかけで) 相棒
42	pate	特にユーモラス	(はげた) 頭のとっぺん
43	pooch	ユーモラス	ワンちゃん
44	pow-wow	ユーモラス	会合, 話し合い
45	prez	ユーモラス	社長, 大統領

番号	単語	ユーモア度	ユーモラスな意味
46	prince	ユーモラス	すばらしい男性, 大統領
47	proboscis	ユーモラス	(人の) 大きな鼻
48	provender	ユーモラス	食糧
49	Romeo	ユーモラス	手当たり次第に女性を誘惑する男
50	rascal	ユーモラス	いたずらっ子
51	rugrat	ユーモラス	(はいはいができるくらいの) 赤ちゃん
52	rump	ユーモラス	(人の) しり, 臀部
53	run-in	ユーモラス	衝突
55	she-devil	ユーモラス	悪魔のような女, 悪女
56	Sherlock	ユーモラス	(わかりきったことなどを言う人を指して) 名探偵
57	shopaholic	ユーモラス	買い物中毒者
58	skulduggery	特にユーモラス	いんちき
59	sleuth	ユーモラス	探偵, デカ
60	soiree	ユーモラス	夜会
61	soupcon	ユーモラス	わずか [かすかな] な食べ物・性格・性質など
62	tackle	ユーモラス	(男の) 一物, さお
63	thespian	ユーモラス	俳優, 女優
64	tribe	ユーモラス	(大) 家族, 大勢
65	troop	ユーモラス	(人の) 群れ, 一行, 一団
66	unmentionables	ユーモラス	下着, 性器
67	virgin	ユーモラス	未経験者
68	warbler	ユーモラス	(あまりうまくない) 歌手
69	woody	ユーモラス	(ペニスの) そそり立ち, エレクト
70	yokel	ユーモラス	田舎者
71	yonder	ユーモラス	どこか知らない所
72	yuks	ユーモラス	(テレビ番組・コメディショーなどの) 冗談, おふざけ

[参考文献]

- 『広辞苑』(2008) 第6版 岩波書店
 『小学館ランダムハウス英和辞典』(1994) 第2版 小学館
 『ロングマン英和辞典』(2008) 第2刷 ピアソン・エデュケーション
 『リーダーズ英和辞典』(2013) 第3版 研究社

[引用文献]

- McGraw, P. & Warner, J. (2014). *The Humor Code*. Simon & Shuster, NY.
 中野清治 (2009) 『英語ジョーク快読のススメ：ジョークがわかれば、言葉も文化もわかる』開拓社
 瀬戸賢一 (2014) 第14刷 『日本語のレトリック：文章表現の技法』岩波書店